

APIC 2023 参加レポート

Report by Kanako Fujimoto



1. はじめに

岡山大学の藤本要子と申します。私は、感染管理認定看護師で、現在は大学院の博士後期課程に在籍し、高齢者施設における感染管理に関する研究に取り組んでいます。このたび、(一財)松本記念財団のご支援を受けて、アメリカのフロリダ州オーランドで6月に開催された、Association of Professionals in Infection Control and Epidemiology (APIC) 2023 annual conference & exposition に参加し、自身の研究のポスター発表を行ってまいりました。本レポートでは、私の初めての感染管理の国際学会参加と発表の経験をご報告いたします。

2. APIC 2023 にチャレンジ!

私が大学院生になった矢先にコロナ禍に突入り、臨床現場を対象とした感染管理の研究をすることは困難な状況でした。そのため、研究チームを組んで文献ベースの本格的な2次的研究に取り組む、根気のいるプロセスと長い時間をかけ、なんとか結果をまとめるところまで漕ぎ着けました。かなりの時間と労力をかけた研究だったので、「せっかくだから大きい国際学会にチャレンジしてみよう!」と思い、APICにポスター発表として演題登録をしてみました。初めての国際学会へのチャレンジのため、演題登録の時点でわからないことだらけでしたが、国際学会での発表経験のある友人に教えを乞いつつ、APICの事務局にメールで問い合わせを何度かしつつ(どんな問い合わせも迅速かつ丁寧にご対応いただきました)、てんやわんやのなかなんとか演題登録の締め切り期日に間に合わせる事ができました。

幸い無事に演題が採択され、また本当にありがたいことに、(一財)松本記念財団から国際学会発表支援を受けることも決まりました。それから渡米の準備の日々です。これまで海外旅行の経験が少ない私は、『地球の歩き方』を買うところから始める始末で、アメリカという遠い国にひとりでたどり着けるのか、不安で一杯でした。自分でも旅行の下調べをしたのですが、不明な点がたくさんあり、旅行会社の担当の方や、在米経験のある大学の先生や友人からアドバイスをもらい、なんとか準備を終えました。

3. ポスター作成と発表準備

今回のポスター発表準備は、私にとって本当に貴重な学びの経験になりました。今回のこちらの財団からのご支援の一環で、Ruth Fallon先生にポスターを見ていただく機会がありました。私が最初にしたポスターは、私の研究で扱うデータの性質もあるのですが、どうしても文字が多く内容が伝わりづらい仕上がりでした。そのポスターに対して、Fallon先生は「何を一番言いたいかわかるポスターにすること」、「目を引いて立ち止まって興味を持ってもらえるようなポスターにすること」というアドバイスをくださいました。そこからポスターのレイアウトを大幅に変更し、文字も減らし、図表を工夫するなどの試行錯誤を重ねました。Fallon先生とやりとりしながら作り上げたポスターは、最初のものとは全く違う出来栄えの、これまでにない斬新なポスターになりました。

APICのポスター発表は国内の学会とは異なり、ポスターセッションとして発表の時間が設けられているわけではなく、決められた時間にポスターの前に待機して来訪者の対応をする、という形式です。最初は「英会話にも自信がないし、ポスターを貼って、あとはそっと立っておいてやり過ぎせばいいかな…」と考えていたのですが、そんな消極的な私を見兼ねたアメリカ帰りの先生に「せっかくアメリカに行くのだから、ポスターに来てくれた人にしっかり自分の研究をアピールしてきなさい!」と喝を入れられました。そこからは、英語でのプレゼンの特訓の日々でした。最初は何度やっても冗長なプレゼンになり、なかなか上手くできなかったのですが、「英語が母国語ではない人の英語でのプレゼンは、言いたいことの三分の一を伝えるぐらいの気持ちでやればいいんだよ!」とアドバイスをもらい、思い切って言いたいことを絞ったプレゼンに作り替え、どうにか及第点をもらえるプレゼンができるようになりました。



© Kanako Fujimoto 2023

4. 憧れの Patricia W. Stone 教授との出会い

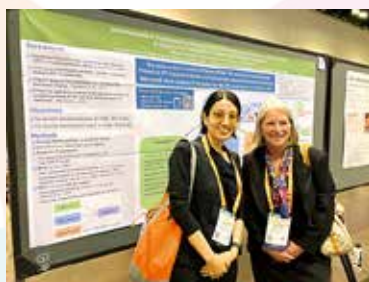
APIC 2023 の開催地であるフロリダ州オーランドまでは、トータル約 17 時間の長いフライトでした。オーランドはディズニーワールドやユニバーサルスタジオ・フロリダなどのテーマパークがたくさんある観光地です。また日本と 13 時間の時差があり、気温、湿度が高く日差しも強い季節でした。私は一人で学会参加したのでテーマパークに行くことは無いだろう…と思っていたのですが、なんと APIC のレセプションイベントの会場がユニバー

サルスタジオで開かれるとのこと、「せっかくだし行っておっか」と、アメリカの地で“おひとり様”テーマパークデビューをしました。さすが

にアトラクションには乗らなかったものの、本場のユニバーサルスタジオをゆっくり散歩でき、良い思い出になりました。

私のポスタープレゼンテーションの時間は初日の朝一番で、ジェットラグと緊張であまり眠れないまま発表当日を迎えました。心臓が口から飛び出るほど緊張しましたが、Fallon 先生をはじめとした今回のポスター発表のサポートをくださった先生方や共同研究者の先生方からの激励の言葉を思い出し、ポスターに立ち寄ってくれた方に、拙い英語ではありますが、果敢にプレゼンさせていただきました。比較的途切れなくポスターに立ち寄ってくださり、ありがたいことに「すごく素晴らしいポスター！」と言ってくださった方もいました。

2 時間ほどの間、訪れてくださった方にプレゼンや質問対応をさせていただいたのですが、その中で、すごく嬉しいことがありました。それは、APIC の学術ジャーナル American Journal of



Infection Control の編集長である Patricia W. Stone 教授が私のポスターに立ち寄ってくださったことです。Stone 先生は、他のポスターを見ながらの流れで立ち寄っていた

だいたようですが、私の拙い英語でのプレゼンの申し出に、「ええ、ぜひあなたのポスターのプレゼンを聞かせて！」と言ってくださいました。Stone 先生は、「APIC でお会いできたらいいな」と思っていた私の憧れの先生で、私の研究を直にプレゼンする機会を得たことは、私にとって本当に嬉しいことでした。しっかりプレゼンの準備をしておいて本当に良かったです。

3 日間の APIC 参加期間中は、他にもここに書ききれないほど色々な経験ができました。アメリカで感染管理に従事する実践家や研究者の方と交流する機会が持てたこと、アメリカの感染管理の実践について色々なセッションを聞くことができたこと、そして、アメリカの学会ランチにびっくりしたこと、などなどたくさんあります。企業や公衆衛生の分野では、病院以外で活躍する感染管理を専門とする看護師の方々がたくさんいたことも印象的で、少し視野が広がったような気がします。

5. 今回の経験を振り返って

今回の APIC 参加を振り返って強く感じたことは、「思い切ってやってみたらなんとかなる！」ということです。何から何まで初めてづくしの APIC 参加&発表でしたが、思い切って演題登録をしてみる、思い切って財団の公募に応募してみる、思い切ったポスターとプレゼンを準備して、思い切って立ち寄ってくれた人に話しかける、という、いつもの自分なら消極的になって逃げたり見送ったりしていたことを「えいやっ」とやってみたら、大変なこともあったけれど不思議なほどうまくいったことに驚いています。特に財団の方々に細やかにサポートいただいたことは本当にありがたかったです。

最後に、日本の感染管理に携わる看護師の皆様にお伝えしたいのは、「国際学会で発表すると楽しい！」ということです。言葉の壁はありますが、伝えたい思いがあれば耳を傾けてくれますし、どうしても通じない…という時でも、今は便利な翻訳アプリケーションが手助けしてくれます。また、英会話が十分にできなくても、ポスターに伝えたいことをしっかり書いておけばちゃんと伝えることができます。

そして、国際学会に行くと、世界に感染管理の仲間がたくさんいることを実感できます。私がお話しさせていただいた感染管理の研究をされている先生は、「日本の感染管理について私たちも知りたい。きっとお互い学びあえることがあるから！」とおっしゃいました。日本の感染管理の素晴らしい実践もぜひ国際学会で世界に発信して、色々な知見を互いにシェアしていければ良いのでは、と思います。

私は今、今回の APIC で発表した研究結果をまとめて論文にする作業に取り組んでいます。今回の経験は、きっとこれからの私を後押ししてくれると思いますし、日本の感染管理の研究をもっと盛り上げていきたい！という私の密かな思いにもつながりました。あらためて、この度は APIC 参加および発表へのご支援いただき、心より感謝しております。本当にありがとうございます。

